梅

九曜文庫

紅梅

以詞為巻名
これはいむかしはるよ我
ちかきおもいのいと称
ろくまわひくるとアリ
按察大納言折紅梅献兵部卿
ノ宮也　此巻別して按察
大納言伝とみてよし　仍竹
川と並ノ一二巻も定めるに
薫中将　竹川よりは始四位侍従

中央は宰相殿と中納言也
此巻には姫君は源中納言にて
とあり是れも竹川乃次
なとみ侍るに又竹川の末
に按察大納言右大臣なる
なとは又按察大納言にて
とあり 不審 此巻に竹川
乃中央なるへし
義了海ニ此巻は別ニ按察
大納言傍也ニ此段全言也

然ば年紀々々雑乱一向
手に付へからすと
一竹川 紅梅と可立次第と云
一紅梅竹川と 一二ノ可立と
云事 右文説也
然るを竹川卿按察大納言
經右大臣然ば紅梅一ノ並
也不審 此文巻年紀不
可紀明 此巻は紅梅右大
臣乃時竹川は玉鬘

一説ノ作トみゆへし
此巻薫大将十二三才ころ也

そのころあせちの大納言と
後号紅梅右大臣 按察
大納言ハ但大臣以前なる也
故致仕のおとゝの
致仕大臣薨去乃事に
もしるしてしるす 此大納
言致仕大臣乃二男柏木ノ
弟也母ハ二条相国四君也
あくしう らうらうしき也
榊巻ニ高砂うたひし人也

いとよりあるもあり
は乃盛勝あるも也
小方ふたり　もとより小方
それともよし
のちよりおほきかと
後太政大臣　野路太政大臣
両號也共以髭黒太政大
臣ならす也
（可）古今集忠仁公ノ前和経
きおほいまうちきみと申ハ

前官ノ號ニハ非ス実其ノ
比ハ国只二人也仍雖不辞
官前後ノ由ニ申也
此號尤可然
（右大臣）清原夏野　号並岡大臣
又号野路大臣ニ
今上御代相国二人也然ハ
後ノ太政大臣ノ號可用之
まちしらすよりて
今はとて宿かれぬともなれきつる

桂のちうらは我とまて　ちるな
とようらし人也
式ア八家ニて
吉末柏の祖父也
坂本アハ宮　常部ハ也
ちのひとよしひ姫し
到梅右大臣のよしひ姫へる也
えきしも　つのとむの人
姫へる也
此子ハ　到梅太大臣息女

二人　森景殿女御中君也
いすれの子ちて
大夫也　母主宰相上也
こ家乃助ちる　主宰相
坂本アハ家女也
つるてまさて　真木柱上
継子ちとも実の人とかれて
なし姫也
ちのくれさの人
姫君ちら名付るらんと

なと我らまてくれく
し飛るおもひき也
なれくしくいまの飛ら
披柱上乃推一段と可能
人ところ　抑も座を
ぬ人のんさやうぬ事とも
あそはして我女好人文
高姫君乃しるあしる
つ語りともあまりは
まさなし堪忍して事

なくてし給ふとせ
きこえておほしたと
大臣乃姫君ハ家の方ハ
達も御弟く嘉きみと
ある也
みちのたちそうは
西向き方也こゝに藤景
殿女御住給也
ひんかしに家のつゝ
寝殿の方の内東ハ西よな

ハ外様にて晴乃こと也
貴親乃んなくし
こちのいろたのみすかおとも
父家　曽祖父　或君家
外祖父　此類思ふよ為
ゆつりちまへし
中宮　明石中宮也
大のおほよの　女御
夕霧乃女也
さのこいひてやい

さぬき人よはのまくさ
よあしけと也
十七八の程と　大君也
中乃君も　これも却よを
あといすかい婚をと白家へ
とおほそ也
またとみそてハ　白家此
調也　此弟君の兄弟乃
姫君かいゆかしく　お想を
よし也

さるはときゝはなれて
前太政大臣よりのかり
給也
君臣合体ノ始終代より
ある也 依之 太神宮
在所にハあひ殿とて必春
日大明神おはしまして片時も離
れ給事なし 然者藤氏
にハ必藤氏ノ人ノ内すべき也
然進ハ関院左大臣冬嗣公
以来代々藤氏摂政関白
帝之外祖也 然るに延喜
聖主藤原乙女に秋好中宮
又朱雀下明石中宮すつて
き源氏立后也 依之藤氏
ねたみ憤ありし也
院乃女御 冷泉院弘徽殿
女御也 藤氏太政大臣女也
つるゝ中しらひ 東宮へ
参りたまへりつゝれ 雅也

わかうとひて　継母北の方
上らうこに大将殿也
とおもて　中納言也北方東宮へ
大将殿へまいる也
まいれるは　中君也
ひんの一のひめ君　三の君北方也
こころばしのやうに
（秘）宮君は中君なとのあるゝ
ひ殿也宮の方可給人か
らむ也

みちへいけるひの　二の宮の方可
給人さふらひ可給まうら
とはふかくしまなのう
うれしとのものゝとものゝ也
かくうち一日のりや
中納言大臣のへ也　新宰相
なりびかえて　あいのうちもん
くらしとおもひて也
けふのさんさ時に
母君へ大納言乃北の方

詞

何よきやらん　母君の詞也
此志様くちよまちて
宿世のかぎれこのまて
みむと也　和方は一段の接
に心かよひきこと也
よろしむくりて　道心の方
まてもあれみれてみは合点
あるゝけきるゝなふやう
なとみえよし也

は清道もまよまて　和歌は色
おもしろくる　継父　実母
の君別し特に珠曲海
との接也
いとゝ只つしう　寿景
殿の子也世中ひろきれ
を新こそ新めをとるひあ
らしと見へ専まそれは
夕暮は女いのやうにとされ
やさしいと色かとろすくおもすも

一義とあるをもしひたりけれとも
新安には宮の方両まりやまろ
らむと思へもなとし以ふか
しらかたをとみてくお
かすも　杜姫乃戯す能ん
月ころなるをたつく　新梅麺
まいれのりきよ　中君也
あ偏のくなよしくるよ
琵琶は未熟なるはきつれ
ぬおうとも

於きなは　紅梅月朔阿ん也
うみのこさうりなかし
此銅一切を通して琳勝
此銅也金盛の世にはみれ
道への名匠乃不作り見
及也及の時節はあなた
鍛錬せられとも自能なる
不のある也されて聞知す
はあるよ也
うちとけても　高祖方此巴也

故六条院　源氏也
右のおとゝなるへし　夕霧也
源氏のつゝまれて比巴乃
ねありしうとも也
源中納言　薫也
匂宮より椎本迄て巻
年紀混乱せり竹河乃
巻ハ薫中納言となりより見て
かうりみ紅梅ハ右大臣
となりふきぬとこゝまてハ

いまた大納言とありし
而又椎本乃中納言とかきても
あるへく候也
あまりひるけたるあと
和きこえんの也
箏ハ琴にも弾するよし
初心なるハむくやうなる絃
也両して四絃ハ撥まて
のくわなれをやらしひと
引つ絃ある上手なるよし

今の白氏文集ハ手本なり
是は古今も万葉もなけれ
とも引歌めでてやさしき
ある書ぬめくや紀ハ夕暮
めおとしに及ぶをそしる也
こゝの和歌のね　此文の筋方
乃此色のね也　此色ハことに
云一切衆生をハ花と云絵
をいことゝ云也
いとよくおほして

源氏夕顔ハ書き物語
ありとも也
趣して古川の序なるハ
花手熟して手きてな
ちるハ云也
紅
優ミして位あることゝ云とん
ちりきゝをかほともちをとめさ
下かろりて本面めしく
義
左手にて入ゆくてみ衣をと起きて
海〻未ハ云　女の不作

乃あたりこそてもとゝする
もにくれやうこそわれこそと
けるにれの中／＼興あるとや
私は我如何称す尋
ねるとまゐれと　御笑ひを
掛けせよとや
見えきそてまつりしと思もし
儀
お梅太夫は家の御方乃
女房ならはさらにりやく
なすもなるにしとよりし女房

なとはつれ中へきのんさ
ある折しも太夫下り
給ひへよんでも下のをそ
してゐんでうてゐれなるをや
て／字濁へし　又／
も／字助字なるみる時は
て／字清てよむもやそれ
随意なるくれぬると云は
也
也芳魂也難自く
主の君　枝稜上乃娘也

みつらとわも　束帯にては
ハ総角也ひんつら也直衣
乃時ハ髪をとりあけて
みつら也
拵つきこそてい　四方に
四方見そ也　又明今ある結
父君の譲と両統也
きらハあけに　あやしく
ハあとを笛ありよくあるは
文不方なりて結を今ある

故ると也
つまひきて　和弾
うるはしくハ弾をはる也
まつるを　興(義)に乗して
囃て唱平おもしろく拍子也
九條殿記云天慶五年
正月七日雜書南依云
此例引青馬今日酒盃十
一巡王以有酒氣吹笛弐
ア卿數定歡之年來史

不有如此之法今日從昔
時甚國挑多々之
あれなるとハ唱事此経
なるへし
ある人のいひしハ
見えつしてねかのみさん梅のまゝ
ことともの理も知人のいひしハ
ましてましにも源氏の
場の場をもちなしとも
楽しくひあるしと　昔よしと

思ひし思ひなりしとも
けちの紀人の　昔の光源
氏にまて紀人の今まて
此世ナ勤るハ絶え乃命法
わるき人のとも
いつはなむ　此つる寺ぬれさ
あるものなんするなん比
大論云　如佛入涅槃之
後門離登云結集諸
經之法其形如佛　仍衆

會疑御来出給

きこしめさむとし
中納言してみ給へきとも
御ありて鴻のまとはしまを
銘のは鴻のこよりにしてくれて
鶯さらに宝まへりはやつ
まいらせてを　先ど御と
南流也　此ノ字ノ心正流や
梅は自然に聞しき様
ありたる鴻の法さまをも

志らぬ也是は心ありて
鴻乃りぬきする梅をみて
鶯の飛ところあるまいあし
とも　乃梅乃中君をと月
いはまる紀のんし
なれきこし月御紀
白子まなれまいもんる
中宮のうへのれつれね
明石中宮御筆参会之任
御いり　以舎上局殿し君

中宮ニヨリテ上﨟有之
此御勤
上﨟より白字ハ出候也
いつれ紙計り つゝミや
やの字書し
内へ入て書き紙不
二重紙也
畳まれて　あね女御ハ
とぢ紙て懐にてあそはせと
嘲呼して その頼也

中川ちさを　白川ちくの
こそ ちうしわしと也
おはへまはしも　白字乃
御前よりハありよ紙也し
もの字有力　書置候し
中川ちやし 此寄座る
と申をは白字ても同お
乃やく有るて用捨し
ろ也
是もとハ人まかすしと

紅梅大納言ハならうみなの卿也
かうのくわんおなしすちにて
故宮の一たうなれハを
あひあひ物まうしとも
下心ハ宮乃君を思を
ありきれともてふてまて
光源氏乃孫也
ひんのしとさこゆるは
東の方 営舎の家梟
女也

うちみそめたちなり侍しかとも
引寄ありぬつ契りなされ
とも不見也
根そのいちさ人のしはぎの
ハ不念也
うちそそのちなりハ従も
あなかしきにハいかたこなゐ
よわくもつのきれねハ消
是と也
うれしのある 引寄あはれ

ねなのみに
あのうちとめて梅を
ちてもくるに柳まきりける
これも色音を異しけるとや
およひはとのね
白宮今夜ハ宿直たれて
とそのけ若君をとめしとよ
め殿也
東宮もえまいりませ
森景殿人お供たまわりの

て流てあめつとも元
身ぬ也
これ殿のあるし　京乃
姫君は也
志もそ心しらむ人のうちそ
君御と参也子細は无れ
とも
あすの秋の月と錦とくなる
紅葉さん人のみちをや
大納言のゆくす人は秋のはさ月

いとよくかよひきてあそびを
遊て

親のさ為とは大納言の實
子乃中君を白玉へとよふ
らしき遊へとも也
兄弟はことに　白露の心
いふかひなき事にふくみし
遊也
これは太り事　宮の君
よかある頃に中君の人

はかなくともみえぬも命明
に此返答もなき也
つとめて　聖胡也
ちゝびさうなるやうれて
人に忍ひ給ひる禅也
殿のうちきうそれめへき
殿すらめあい殿のうちもさ
うそれのうしと也
清て殿いふは　宮の君の事
を殿様の妻君をたて之

にのまへひめ也
おきさきとももとは按察大納
母北方姉の娘なり
されはいもとは　二代の后也
同腹なれとも兄弟は娘なとも
ふつ御也
東くことあらは　春宮母御
中宮なれとも
おはりのまゝ　宮の姫君也
うひあるさまなれ　とは

ゆゑもも宮は君をとり
そてふく見ゆ也
とも宮は御しうの
按察大納言嫡女秦景房
は一腹とは申せ紀娘なつきと
て見ゆ也
おなしことは　いつれもお
なし兄弟なれは　あれしも
おなしくは宮居と東宮
へはまいりともなちとと見ゆ

よしや

これを按するに　されと

東宮には婦女多かりけれ

いときなくて白玄試東宮

へ出入あまたきこえしなり

られしゆゑの　ぬしは此昔

なれとは世乃内音信事

望をとる君の見也

これもきその人乃　前は

今ねをさきみとるもにさうし

ら

せきとて物語にもあるなる

つしには嘆の返

乱すまひは大ぬさをつとへも

しるなり

ねろきるも　大ぬさの綱

やうよ領状乃許となる

それなり

あまり　すきたるまてに

夕暮と歌詠大ぬさといひ

名の流るをつると後言も

中にかの当人の前にては
雁とくらきみ給ふれとう
まつみれ兵部卿の又香
侍従と申けるも二番姫君
御かの引とは云てさるも
まへのあまわつる君の
白方は天能乃勝利ば
すき人給人まなれもたまふの
梅も君の袖よりにほいて勝
れる香をはなて（まきと）

白方はかなひ給ふ侍中
君も勝まして落とる
つしと云ん心するへしえ
あのめえもいそをすく
まして候んも
す玉くしや　文の綱も
まあやのる　中君なまん
乃んも
候へとる　梅枝とされて
かく申けるをさせては言

実は見えて中流るゝよし
此月似たるある也
花乃ちるをおしむを
むねあてにうつろふ和
しられとも難も見えぬ
花をわちつさむとある
情は金はあつまと人の
との縁もやあり衛しと
向ひをとゝめて見ひの
此縁也

なしんとけをを　和歌の心
此方下りて縁て
春宮よ退出也
人はおとゝおもひしを
若君の天縁乃まねひ
とゝ人い見ひし也
実は見おもかれしよりて
東宮は推量あるゝる
也　此方よりて縁也
むへまれも　宜也　むも也

これハ細をとゑのん也
すさみけり　荒ノ字也（弄）
弄ハはけしく用るは
まれ也
大あらきの杜乃下草すさめれば
駒もすさめずかる人もなし
すさめぬ口見といひける
も此弄乃心也
荒淫乃心也とする調也
ふくもてあそびをともを

さむと云又もてあそびし
るそすてゝさる跡もなき
むと云也風もすさむ為すさ
むと云ハ風吹為縁也風吹
すさむ為ありすさむと云
いやむるをといへり
こゝに心をうつすこや
哥藤大納言とよわ清濁や
あまし清濁ありけるや
うよハあまりしうと也

はらし　大納言乃遊著也
さるしにありしとぞ
あきらけみつ方　家姫君の
此方也
うつりそ　白家めくるや
名しのこぬ風流と云
ともなりしひ　蒙類方
しうひと云事もありて
此字見しておもしろひ
三姉らん女とえたりある

事もあり　此分可細外
皆は人おしらひする女ら
に如此いえしぬ物をと
とぞ
源中納言ハ　薫也
人のうこそ　一事人香
こそ　薫の事ハ一向几
人にあしれ色香花散
極りしまゝとぞ
なきし薫のきぬ　乳と

白字と黒字とのちがひは
下梅ハ自然の白を以て
生じするま也黒ハ自然
乃うるほひをもちてる梅
のよし也
これ字あとの　白字君
梅をとめて称もちとも
宮みゆるハ　字乃君也
世の人もはゆとる
世るみ人のんは皆はの枝

鶯よ流くねちれも営
無人て字をもて和梅
大納言乃長女をとこれ
むうけ中を字姫君とい
ひまる人いあま紀也上の返
答も此方こて紙見ひて
乃称しまちまんし
此ふきのつれ　見ふさい
とは紙見ふすちなる耳
よりなる紀也

禅の字ハ心に叶也ふるひ
とるとも世俗に云同事也
故実乃一般なれとよく
ふさひ脇と白衣ハ紅と
め脇也は勝乃あるかさハ
紅よつるなる也
脇ふとあれと　白衣の事也
太納言の君　太納言ハ中宮
を白衣で口をかけて
人るひをとるて　此小方

乃ころな也
ひまけ有するてとし
此方ゆへに中宮に如此
もあつてと申脇也
ある純紙の名前あまとも
手もとわ引入る姫君
なるよりて返答もな
しされもいよく白衣ハ
唐衛し純乃人もなひそ也
ありか。人の

伊の君白紙切てみれは
何もかゝれさりしと也
なとのも　白氏容儀卑
賤且ふ実也行末とゝく
うのむりもえつるへしと
北方おもはする也
八乃みやのひめきみにて
宇治八宮（桐壺帝第八皇子）此家
乃中君事也年紀乱離
なり此絵推本にあてる也

或按右大臣列傳とみる
時ハ年紀乱離乃ゆゑ
も入さる也
まゐりのよハ　吉實は
領状申さるゝ事を
え思ひとゝまり給へる也
かうしもよろ紀えりにて
白家乃ゆんにはよの給と
ふれると謝するもりに母
君の返答はし給ふ也

河しらの画
母君のめしにより仰抱あ
ら試筆